

平成 30 年 6 月 12 日現在

機関番号：12611

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13137

研究課題名(和文) 乳児院における心理コンサルテーション：最早期の関係性支援に着目した萌芽的研究

研究課題名(英文) Consultation in institutional care: an exploratory study focused on attachment development in the early age

研究代表者

青木 紀久代 (Aoki, Kikuyo)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：10254129

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、乳児院で暮らす最早期の子どもの愛着発達を縦断的観察から明らかにすることであった。異なる地域の3乳児院のいずれかに、生後1ヶ月までに入所した乳児10名を対象とした。毎月縦断的に愛着行動発達をチェックリストで確認した。次に、歩行移動が無理なく行えるようになってから18か月までの間に、ストレンジシチュエーション法(SSP)による愛着パターンを測定した。その結果、愛着発達は4ヶ月時にわずかに停滞するも、その後は家庭児と同様の発達過程が認められ、愛着パターンも安定型が多く見られることがわかった。これらの成果を乳児院の職員に対するコンサルテーションに活用するために、リーフレットを作成した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the process of attachment development in institution-cared infants through longitudinal observation. The participants were ten infants from 3 institutions in various area of Japan. Video observation was used in this study and the development of attachment was assessed monthly with checklist of attachment behaviors after the infants reached one month old. Attachment pattern was assessed with the Strange Situation Procedure (SSP) after the infants can walk before 18th month. The results indicated that the development of attachment in these infants was basically not different from family-cared infants although there is a distinguished decrease in achievement ratio at the 4th month. Furthermore, most of the participants showed secure attachment in the SSP. From this study, we made the leaflet which showed attachment process in infants and used for psychological consultation in the institutions.

研究分野：臨床心理学

キーワード：愛着行動 乳児院 縦断的観察 SSP コンサルテーション

## 1. 研究開始当初の背景

社会的養護のうち施設養育は、最早期の子どもに必要な養育者との確たる愛着関係を大きく阻害するものであるとして、欧米を中心とした国外の成果によって問題視されてきた。そのため施設養育が主となる日本に対して、国外からの改善勧告が相次いだ。こうした経緯もあり、現在日本では、里親制度、小規模単位の施設養育が強く推進されている。特に乳児院においては、養育の質の向上に向け、常勤心理職の配置が決まった。

乳児院の心理職員には、虐待や応答的養育環境の阻害といったハイリスクな子どもたちの発達促進につながる担当養育者へのコンサルテーションが強く期待されている(全国乳児福祉協議会, 2014)。

しかしながら、日本の乳児院で養育を受ける乳児の最早期の愛着形成過程を系統立てて明らかにした研究はほとんどない。乳児の愛着行動の発達を生活場面で適切にとらえ、心理職がその支援に貢献していくためにも、まずは基礎的な観察データの蓄積が急務である。

## 2. 研究の目的

本研究では、乳児院における乳児の愛着行動の発達過程を縦断的観察によって明らかにすることを目的とした。また、そこで得られた知見を実装し、職員などに向け、実践に役立つ解説書を作成していくことを目指した。

## 3. 研究の方法

### (1) 対象

異なる地域にある乳児院3施設。生後1ヶ月までに入所した乳児10名。

### (2) 方法

本研究の主な構成は、以下の通りである。  
縦断的観察

毎月誕生日の前後1週間以内に、生活場面に入り、担当養育者と乳児の相互作用場面を中心に原則12ヶ月までビデオ撮影を行った。

ストレンジシチュエーション法(以下SSP)

12ヶ月を超え、18ヶ月までの間で歩行移動が無理なく行えるようになった時点で、SSPを実施した。

心理職によるコンサルテーション、複数事例の検討

### (3) 倫理的配慮

本研究は、研究代表者所属機関における倫理審査の承認を得て行われた。

調査内容は全て、研究協力施設との検討を

経て、了承されたもののみを実施した。調査実施の際は、調査の趣旨及び個人情報の管理等の本研究に関する必要な事項に関して、施設職員や担当養育者に十分説明し、承諾を得た上で、調査協力を依頼した。

調査協力者の個人情報は、個人が特定され得る情報を匿名化した。本調査で得られたデータを成果発表等に用いる場合は、事前に調査関係者に内容を確認し、承認を得た。個人情報が流出することのないよう万全の注意を払った。

## 4. 研究成果

### (1) 愛着行動の発達指標の整理

文献レビューを行い、乳児の愛着行動の出現を、月齢ごとに整理した(表1)。

表1 愛着行動の指標と各指標の達成率

| 時期(月齢)   | アタッチメント行動の項目  | 達成率                |
|--|---|--------------------|
| 第一段階   | 1. 他のものと比べて人の顔を見ることへの嗜好性を示す   | 100.0%             |
|  | 2. 正面から顔を見せ、凝視し、話しかけると乳児がそれを見ていることで視的刺激となる                                  |                    |
|  | 3. 穏やかな聴覚刺激に対して静かになり注意を向ける傾向にあり、人の声に特に応答的                                   |                    |
|  | 4. 人の声を好んで認識する  |                    |
|  | 5. 顔を見せ、話しかけるとそれを追視する   | 85.0%              |
|  | 6. 手のひらへの刺激に対するグラスピングがみられる  |                    |
|  | 7. 目を他に移さずに母親の顔を凝視しながら授乳される   | 78.6%              |
|  | 8. 他者よりも母親に多く声掛けする  | 70.0%              |
|  | 9. 他者ではなく母親に抱かれるとすぐに泣き止む  |                    |
|  | 10. 母親に聞かされた音を反復する  |                    |
|  | 第二段階  | 11. 母親をみると笑い、声を発する |
| 12. 母親の動きを目で追う                                   |   |                    |
| 13. 母親との分離で落ち込んで、再会時には喜んで(微笑む、キャッキヤと叫ぶ、興奮する)出迎える |   |                    |
| 14. 母親が離れると泣く、後を追う、またはその両方をする(～7ヶ月まで)            |   |                    |
| 15. 膝の上や隣にいる時も、自発的に養育者とコンタクトを取ろうとする(～9ヶ月まで)      |   |                    |
| 16. 養育者によじ登る(～9ヶ月まで)                             |   |                    |
| 第三段階   | 17. 後追いつける  | 71.9%              |
|  | 18. 再会すると手をたたく喜び(～12ヶ月)   | 72.4%              |
|  | 19. 母親を安全基地として探索する<br>ずりばいができるようになると、いつも母親の近くにいるのではなく、少し離れて探索する(7ヶ月半～10ヶ月半) |                    |
|  | 20. 母親に顔をうずめる(～15ヶ月)  | 77.5%              |
| 10   | 21. しがみつく<br>強いしがみつきは、知らない人や知らない場所への反応として現れる(～14ヶ月)                         | 77.5%              |

### (2) 縦断的観察による各乳児の愛着行動の発達の特徴

各乳児のビデオ記録をもとに、(1)の指標の有無を確認した。

その結果、どの月齢でもおおむね70%以上愛着行動指標が達成されていた。途中4ヶ月頃に達成率が落ち込んだものの、5ヶ月以降は再び70%以上達成されていた(表1、図1)。

これは、施設養育で育った子どもは、心理的に引きこもった状態で非応答的、あるいは特定の区別された人物への愛着行動が確認できないとされる国外の研究結果 (Chisholm et al., 1995; Chisholm, 1998) とは異なっていた。

4ヶ月時の落ち込みは、「母親の動きを目で追う」、「母親との分離で落ち込んでも再会時には喜んで出迎える」の項目が達成されにくかったために生じていた。

これらの項目は、移動行動が難しいこの時期、多くの場合は担当養育者がそばにおり、2人だけのシーンだったことで、担当外養育者との差を特定しづらかった可能性が考えられた。このため、この結果については、今後さらに慎重に検証していく必要があるものと思われる。

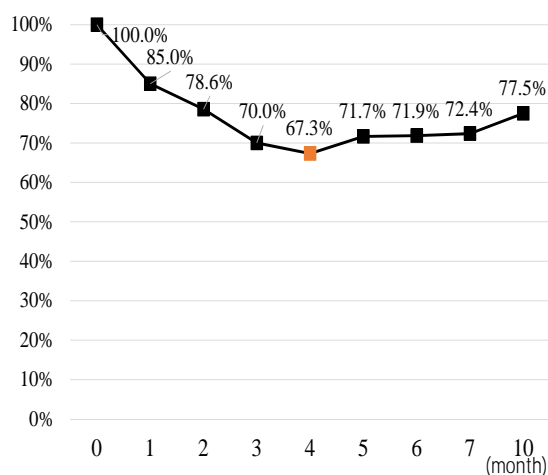


図1 各月齢の指標の達成率の推移 (%)

### (3) SSPの実施

各乳児の愛着形成後に SSP を実施したところ、約 70% は安定型の愛着スタイルであった。また不安定型は、全て抵抗/両価型であり、回避型、無秩序型は見られなかった。

国外研究では、施設養育を経験した子どもたちの愛着スタイルは、安定型が約 20%、無秩序型が約 60% と、無秩序型の割合が高い問題が報告されていた (Zeanah et al., 2005)。

また日本の家庭児を対象とした先行研究との比較も重要である。例えば、80年代の調査 (Miyake, Chen, & Campos, 1985) においても、最新の調査 (Kondo-Ikemura, Behrens, & Umemura, in press) においても、安定型の出現率は、70% 超となっている。なおかつ、不安定型の内訳は、回避型がほとんどみられない。こうした日本の家庭児における SSP の結果の特徴は、30年間維持されている。

本研究の結果が、これらの結果に合致していることは、着目すべきことであろう。

また、縦断的観察によって、途中愛着の発達が見える場合にも、第3段階に向か

うところで修正されてくる様子を事例的に把握することができた。

以上から本研究は、施設養育が愛着関係の構築に支障をきたすとする国外の知見とは異なり、日本独自の施設養育の良質性を示したものである。

今後は、さらにケース数を増やして、量的な分析を進めていく価値があるものと考えられる。

### (4) 現場に対する成果の還元

これまで見てきたように、本研究は、臨床的な現場に入り込んで、基礎的なデータを収集する必要があった。このため、養育の日常を犯すことなく、また、研究協力者もこの研究に参加することでエンパワーされ、施設全体の養育の質の向上に役立つよう、実践的な研究デザインを重視した。

例えば、毎回の観察後のフィードバックを丁寧に行い、特に SSP 実施後は、発達の経過がわかるように記録を再編し、各協力院の職員全体にフィードバックを行った。

その結果、研究活動後も、継続して、愛着形成に着目した養育について、自主的な議論が交わされるようになっていった。

このように、本研究を通じて、愛着形成に対する乳児院の関心と発達支援の動機づけが一層高まり、施設の心理職との協働関係が培われたことは、評価できる。

また、本研究の成果を広く関係者に還元する実装として、月齢に応じて着目すべき、乳児の愛着行動指標を、観察記録を参考に、乳児院で暮らす乳児の生活実態に即した形で再編し、リーフレットを作成した。これらは、全国乳児福祉協議会の目に留まることとなり、協議会を通じて、全国の全ての乳児院に、リーフレットが送付された。

以上のような経緯から、本研究の成果の一部は、現場の実務家に対し、着目すべき乳児の愛着行動を提示することができたと言えるだろう。

### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 15 件)

青木紀久代、乳児院で乳幼児の心の育ちを支えること、そだちの科学、査読無、30 巻、2018、35-39

小野島萌、大塚己恭、青木紀久代、乳幼児の発達のチェックリストにみるアタッチメント行動、お茶の水女子大学心理臨床センター紀要、査読有、19 巻、2018、61-69

青木紀久代、保育における“気になる子”の親とのコミュニケーションと支援、発達、査読無、149 巻、2017、64-67

青木紀久代、乳児院での関係性支援を考える 小規模グループケアの質と再早期のアタッチメント、乳児保育、査読無、185 巻、2017、15-19

青木紀久代、子どもを虐待する親の気持ち、子どもの文化、査読無、49 巻 12 号、2017、2-7

青木紀久代、愛着（アタッチメント）理論の成り立ちと発展、精神療法、査読無、43 巻 4 号、2017、467-473

青木紀久代、保育におけるトラウマを抱えた子どものケア、発達、査読無、145 巻、2016、14-18

大塚己恭、黒木咲、青木紀久代、乳幼児期の臨床的問題とアタッチメント、お茶の水女子大学心理臨床相談センター紀要、査読有、17 巻、2016、27-38  
[http://133.65.151.33/ocha/bitstream/10083/59668/1/17\\_3\\_p27-38.pdf](http://133.65.151.33/ocha/bitstream/10083/59668/1/17_3_p27-38.pdf)

(他 7 件)

〔学会発表〕(計 13 件)

Aoki, K., Kondo-Ikemura, K., Onojima, M., & Otsuka, M. The development of attachment in the first year among institutionalized children in Japan. Poster presented at the 16th World Congress of the World Association for Infant Mental Health, 2018.5.27, Ergife Palace Hotel (Roma, Italy)

青木紀久代・近藤清美、乳児院における再早期のアタッチメント行動の発達(1) 最早期の行動指標の作成、日本心理臨床学会第 36 回秋季大会、2017 年 11 月 21 日、パシフィコ横浜(横浜市、神奈川県)

Aoki, K., Shimada, K., Yokoyama, R., & Otsuka, M. Does the renovation of child-care structure in infant-homes affect the infants' development? Poster presented at the 15th World Congress of the World Association for Infant Mental Health, 2016.6.1, Clarion Congress Hotel (Prague, Czech Republic)

(他 10 件)

〔図書〕(計 4 件)

青木紀久代、野村俊明、福村出版、不安、2017、192

藤森和美、青木紀久代、福村出版、トラウマ、2016、184

(他 2 件)

〔その他〕(計 2 件)

リーフレット

青木紀久代、愛着の指標を綴ろう、2018

(他 1 件)

6 . 研究組織

(1)研究代表者

青木 紀久代 (AOKI, Kikuyo)  
お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授  
研究者番号：10254129

(2)連携研究者

池邨 清美 (IKEMURA, Kiyomi)  
帝京大学・文学部・教授  
研究者番号：80201911